

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2008

課題番号：19500549

研究課題名(和文) スポーツ健康科学による学校不適応の改善プログラム開発

研究課題名(英文) A program for promotion of school adaptability for children by applying the science of sports and health.

研究代表者

北村 薫 (KITAMURA KAORU)

順天堂大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：60138360

研究成果の概要：本研究は2つの研究からなり、1つは児童生徒の遊び体験や身体活動に対する認識と学校適応との関係を探る質問紙調査研究であり、もう1つは調査結果をふまえた実践研究として、中学校における身体活動を取り入れたピアサポートプログラムと小学校における適応支援を目的としたスクールサポート活動における効果的なシステム構築とその効果を検討するものである。

①調査研究：生活習慣および身体活動の恩恵・負担尺度と学校適応感等との関連：「身体活動の恩恵」得点と良好な学校適応とが正相関を示し、「身体活動の負担」得点は、学校嫌悪感と正相関を示している②実践研究1：中学校におけるピアサポートプログラムの実践：身体活動を伴うトレスマネジメント等を実施し、プログラムへの参加意欲が強い群ほど、身体状況認識や自己肯定感、学校適応が良好で、キレやすい傾向を現す反応的攻撃性が低くなっている③実践研究2：小学校におけるスクールサポートの実践：教室内で配慮の必要な発達障害児童に対して大学生が学習面や生活面での適応支援を実施し、大学の教員養成機能と学校現場との協働システムモデルを提出した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 ・ スポーツ社会学

キーワード：運動・身体活動、スクールサポート、ピアサポート、ストレスマネジメント

1. 研究開始当初の背景

これまでわれわれは、運動・スポーツを活用した地域共同型の健康教育講座におけるピアグループのプログラムが、健康増進と対人関係におけるサポート志向の醸成に有効であることを確認してきた。また、近年では学校教育現場において、児童・生徒の攻撃性の自己コントロールの改善や軽度発達障害等を有する児童生徒に対する学校適応の向上を目的としたスクールサポートやピアサポート活動において、身体活動を導入したプログラムを実践することが一定の効果をあげていることも把握してきた。

本研究に先行する研究としては、順天堂大学学長特別共同プロジェクト研究(平成17～18

年)において、研究課題「医療保健と学校教育の連携による地域保健活動のシステム構築と児童生徒の健全育成のためのピアサポートプログラムの開発」を実践した。自治体の思春期保健委員会の協力を得て、また教職を目指している大学生サポーターの参加による中学生の身体活動を用いたピアサポートプログラムの有効性についても一部確認できている段階であった。

2. 研究の目的

(1) 児童生徒の身体認識と学校適応の関連を探る調査研究

学校教育現場における児童生徒の学校不適応が議論されるようになって既に久しい。従来これには臨床心理学的研究が主に対応してきた分

野である。これをより身体健康側面に光を当てて学校保健体育の問題からもとらえなおし、体育社会学・体育経営学的な視点を絡めて、運動・スポーツを通しての健全育成という観点から問題解決の道を探ることも必要であろう。

現実の問題としていわゆる「普通の生徒」がキレル現象や対人関係能力の欠如に起因すると見られる「いじめ」「学級崩壊」の頻発が指摘されている。こうした問題行動を呈する一群には、特に対人関係発達の障害もしくは停滞といった、いわば自我形成になんらかの不全を抱えている児童生徒も少なからず散見される。また、近年は、いわゆる軽度「発達障害」に関心が向けられ、特有の認知や行動傾向を把握し、また神経科学的な状態解明とそれへの治療的・教育的な介入方法、さらにそれを支えるシステムの構築が急務となっている。

本研究は、軽度発達障害児も含めて問題行動や不適応の基底にある「発達のおくれ」において特有な認知特性や行動傾向を改善するために、「個や集団に対する適応状態の把握」「適切な指導形態（ピアグループによるストレスマネジメントや運動・スポーツの導入）」を導入することで、児童生徒の身体的な自己認識を主に身体活動の行った後の状態の認識や気分の側面を把握して、児童生徒の攻撃性や学校適応感との関係を明らかにしていく。

さらにここでは児童・生徒が生活する場における態度の構造分析を、Merton, R. Kのアンミー論の観点（適応様式を個人の目標と手段とを組み合わせて考える観点）からの説明も試みる。ここでの主な活動内容が運動やスポーツであり、活動効果（身体感覚・学校適応・対人関係の変化）測定の詳細なモデルを見つけ出すことも目的の1つとする。

(2) 中学校におけるピアサポートプログラムの実践研究

1) プログラムのねらい

子どもや若者が時代状況の影響を受けて大きく変化していくのは当然のことである。特にここ約30年の変化には、それ以前の変化とは異質でかつ甚大な変化があったと思われる。1970年代にすでに「公園や路地裏から子どもたちが消えた」と教育社会学者が指摘し、その後、1980年代にはテレビゲーム・ファミコンが登場し、さらに1990年代からはインターネット・携帯電話が子どもたちの日常に深く侵入し、遊びの内容だけでなく場の構造もそれに伴う対人世界も劇的に変化させてきた。そこから急速に進んだ現象は、子どもの「集団離れ」「運動離れ」であり、それに随伴して生じた大きな問題は、子どもたちの身体活動の衰微と体力低下であった。

現在の中学生における学校不適応の背景には、

やはり子どもたちが多様な人間接触を経験しながら関係性を紡ぐ力を発達させる場も機会も減少しており、それぞれの発達段階に見合った対人関係のスキルを身につけることが困難になっている状況が見て取れる。対人関係のスキルが身につけていない子どもたちにとっては、仲間同士の交流のなかでも自分の要求を一方的に通そうとすると「攻撃行動」となり、また一方では、自分を守るために「回避ないしは退却」するならば不登校や引きこもりの問題として析出してくる。このような事態が進行するにともなう、彼らが日常生活のなかで自然に対人スキルや適切なく、生活習慣・運動習慣にも変化が表れている。身体活動の衰微による無気力や身体的不全感（だるい、疲れやすいなど）も頻繁に報告されるようになった。

学校教育現場では、子どもたちの相互援助性に着目して、対人スキルや社会性の育成を目指すピアサポートプログラムに関心が集まっている。その背景には、子どもたちの対人関係能力の欠如に起因すると思われる「いじめ」や「学級崩壊」が頻発していること、また遊びの変質、急激な社会変動等に伴って、意図的な介入なしには、子どもたちの対人スキルや社会性を育むことが困難になった状況がある。本研究では、ピアサポートの実践形態を整理し、日本の学校教育現場に即したシステムを考えていく。

(3) 特別支援スクールサポート

小学校において、軽度発達障害を有する児童の学習や対人状況における適応支援のために、教職を志す大学生に一定のガイダンスを経て、学校内の諸活動に参入させ、特に児童の学習場面や行事等において支援活動を行うスクールサポートモデルを構築する。

3. 研究の方法

(1) 調査研究

1) 目的：児童生徒の学校不適応に関連する要因を身体活動に対する認識を含めて生活環境や生活意識から多角的に浮き彫りにすること。

表1. 調査対象

		タイプA	タイプB	全体
小学5年生	男子	121	70	191
	女子	120	73	193
小学6年生	男子	110	73	183
	女子	95	65	160
中学1年生	男子	118	145	263
	女子	95	124	219
中学2年生	男子	100	171	271
	女子	92	167	259
中学3年生	男子	125	129	254
	女子	92	120	212
合計	男子	574	588	1162
	女子	494	549	1043

2) 調査期間・調査対象：2008年11月に千葉県公立小学校11校と公立中学校4校に在籍する児童および生徒2205名（男子1162名、女子1043

名)を対象に質問紙調査を実施した。児童および生徒の精神的負担を考慮し、質問紙を有能感や社会的スキルを含んだタイプAと攻撃性や共感性を含んだタイプBに分けて実施した。

3) 質問紙の構成

○共通項目 ①生活環境：クラブ活動への所属の有無、兄弟姉妹の構成、祖父母との同居の有無、睡眠の状況、テレビ・ゲームの使用状況、遊びの場や時間を問う項目を作成し使用した。

②逸脱行動・無気力感：逸脱行動の測定には「イライラしたり、ムカつくことがありますか?」「物に当たることがありますか?」「ケンカをすることがありますか?」の3項目を問う。

③学校における文化的目標や制度的手段：児童生徒の社会生活の主体が学校にあることを踏まえ、Merton (1957) のアノミー論を学校状況に置き換えて、「あなたは学校での学習や生活の目標を大切にしていますか」(文化的目標)、「あなたは学校の規則を守っていますか」(制度的手段)の2項目を使用した。さらに、「あなたは日常生活において、もっとも大切にしているものは何ですか?」という項目を作成し、「家族」「ゲーム」「健康」「運動」「勉強」「友だち」「お金」「その他」から選択させた。

④学校適応感：久世ら (1985) の学校生活に対する意識の尺度と原岡 (1972) の登校拒否傾向質問項目を参考に生徒の登校回避感情測定尺度のうち校不適応感を測定するための登校回避感情測定尺度の一部改変を加えて使用した。

⑤身体活動への認識：Marcusら (1992) の意思決定バランス質問紙と池田ら (1997) の身体活動の利益と損失の意思バランス項目、および岡ら (2002) の運動行動の意思のバランス尺度から再構成した。さらに、それらの項目を子どもに適合するように変更し、身体活動の恩恵や負担として適当と思われる項目を付け加え、子ども用身体活動の恩恵・負担尺度から行使されている。本研究においては、身体活動に対する「考え方」に着目した上地ら (2003) の子ども用身体活動の恩恵・負担尺度の8項目を使用した。

○タイプAで用いた項目

①有能感：Harter (1982) の作成した認知的コンピタンス、社会的コンピタンス、身体的コンピタンス、総合的自己評価の4下位尺度からなる児童用コンピタンス尺度 (Perceived Competence Scale for Children) を、勝俣・篠原 (2000) が邦訳し、さらに生活コンピタンスを加えて作成した熊大式コンピタンス尺度 (S型) を使用した。ここでは児童生徒の精神的負担を考慮し、20項目に短縮して使用した。

②社会的スキル：Goldsteinら (1986) は、若者にとって必要な社会的スキルを「初歩的なスキル」「高度のスキル」「感情処理のスキル」「攻

撃に代わるスキル」「ストレスを処理するスキル」「計画のスキル」に分類し、これに基づいてGoldsteinら作成したリストをもとに、菊池

(1988) が社会的スキルを測定するための尺度として作成したKiss-18を使用。子どもに適切な項目を抽出し、さらにわかりやすいように表現を一部改変して6項目を使用した。

○タイプBで用いた項目

①衝動的な攻撃性：反応的攻撃は、主に先行する嫌悪事象によって喚起される衝動的な攻撃と考えることが可能あり、現在の子どもに見られる不適応行動の主要なスペクトラムでもある「キレル」と呼ばれる衝動的な攻撃行動を説明する鍵概念になると考えられる。いじめ被害者・加害者ともに反応的攻撃性が高いことを明らかにした研究もある。ここでは濱口 (2004) が作成した中学生用反応的攻撃性尺度を使用した。さらに、反応的攻撃性と思春期以降の抑うつ傾向との関連性についても明らかにしている。反応的攻撃性に着目することは児童生徒の学校不適応を改善する際の介入を施す上でも重要であると考えられる。

②共感性：学校不適応の一側面であると考えられる衝動的な攻撃性を抑制する要因の一つとして共感性に着目し、丸山・清水 (1990) がDavis (1983) のパースペクティブ・テイキング尺度を翻訳した項目をわかりやすい語句に改良したり、元の尺度の意味を損なわない形で改めて翻訳し直したり、さらに逆転項目を増やすなどして作成した認知的共感性尺度を使用した。

(2) 中学校でのピアサポートプログラムの実践

平成19～20年度に、1公立中学校において、計8回(2回は授業時間内)のピアサポートプログラムを実施した概要を示す。

生徒たちが、日常生活している仲間集団(仲良しグループや学級、部活)を超えて、その他の仲間と遭遇する機会やグループ活動による意見の交流や論争する場面を意図的に作り出すことで、対人関係において日常的に起こりうるインシデントやアクシデントに慣れ、対人スキルを高める機会を提供しようと試みた。各学年各クラスから数人の参加者を募り計40人前後によるグループ活動(5～6人のグループ編成)を行った。学校生活のさまざまな局面でリーダーシップを発揮できる生徒を養成するためのトレーニングに資することが主な目的である。さらに、教員および臨床心理職を志望している大学生(2校)延べ20名が活動計画作成の段階から加わり、中学生のピアサポート活動のファシリテーターとして継続的に参加した。活動内容には体活動を伴ったグループワークやストレスマネジメントを積極的に導入した。

滝(2000)が指摘したように日本の教育システムに即し、かつ学級単位を超えた広がりを見通しのあるプログラム開発を主眼とする。また水野(2006)は、学校単体で有する資源の限界に触れ、思春期カウンセリングの専門職や大学生ファシリテーターの参加による協働が効果を持つことを示している。

公立中学校によるシステム構築を、学校全体にわたる取組となるよう中学生を学年・性別を超えてグループ編成し、保健所の思春期保健担当職員や大学生サポーターの参加など多職種協働によるプログラムを実施した。

(3) 小学校における特別支援を中心としたスクールサポートの実践

1) スクールサポート導入の手順

軽度発達障害を有する児童の学習や対人状況における適応支援のために、教職を志す大学生に一定のガイダンスを経て、学校内の諸活動に参入させ、特に児童の学習場面や行事等において支援活動を行う。

①連絡調整会議の設定：サポート対象の公立小学校校長、特別支援教育コーディネーター(学校ごとに指定を受ける教員)、関係する教員、大学側から教育心理学研究室教員、同研究室大学院生、学生の代表者による運営を調整する会議を設定(学期のはじめとおわりに常設、また必要に応じて開催)

②サポート対象小学校の現状把握：学校や学級の状況、軽度発達障害を有する児童の所見等の情報共有

③大学生スクールサポーター(以下「サポーター」とする)の研修：教育心理学ゼミナールを中心として教職履修大学生への研修を実施(サポートの目的と校内での対応方法)

④事例検討会の実施：大学における学生へのスーパーバイズ(随時)と連絡調整会議のメンバーによる事例検討会の実施

⑤連絡調整会議でのサポート体制の検討

2) サポート活動の概要

○実施期間：平成19年10月～20年度末(年度ごとに再契約する)

○サポート内容：①学級適応が困難な児童が在籍している学級での介助活動：T・Tやマンツーマンでの学習指導、別室でのコンパニオン活動 ②運動会等の校内行事での支援 ③校外学習における随行、を行う。

3) 学級担任との連絡調整

学校現場の時間的制約を配慮して、連絡ノートを作成して学級担任と連絡調整する。

4) サポート活動報告書の作成

参加したサポーターは、その日の活動について、①クラス・時間・場所②対象児童の状況・

背景③関わり方介入したこと④介入後の児童の変化⑤課題等について報告する。

4. 研究成果

(1) 調査研究

1) 部活動の参加状況

学校段階や性別を問わず約90%が部活動に参加している。小学生の女子は文化部への参加が最も多いが、小学生の男子、中学生の男女は運動部への参加が最も多い。中でも中学生の男子の運動部への参加は80%を超えている。

		運動部		文化部		未加入	
		人数	%	人数	%	人数	%
小学生	男子	235	64	103	28	31	8
	女子	148	43	160	47	36	10
中学生	男子	639	83	39	5	94	12
	女子	405	60	210	31	63	9

2) 攻撃性と無気力(1(ない)～4(よくある)点)

中学生では「イライラ」「無気力」の得点が高く、小学生では「物に当たる」や「けんか」の得点が高くなっている。

		イライラ		物当たり	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
小学5年生	男子	2.04	0.90	2.63	0.95
	女子	2.01	0.89	2.61	0.96
小学6年生	男子	2.08	0.94	2.58	1.03
	女子	2.22	0.90	2.81	0.95
中学1年生	男子	2.55	0.86	2.06	0.92
	女子	2.89	0.82	2.23	0.92
中学2年生	男子	2.69	0.87	1.99	0.93
	女子	2.99	0.73	2.34	0.94
中学3年生	男子	2.82	0.89	2.06	0.98
	女子	2.92	0.71	2.12	1.11

		ケンカ		無気力	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
小学5年生	男子	2.43	1.03	1.78	0.41
	女子	2.31	0.94	1.64	0.48
小学6年生	男子	2.57	1.04	1.67	0.47
	女子	2.64	0.91	1.58	0.50
中学1年生	男子	2.18	1.02	2.52	1.01
	女子	2.48	0.95	2.81	0.91
中学2年生	男子	2.02	0.92	2.72	0.94
	女子	2.51	0.93	2.97	0.80
中学3年生	男子	1.79	0.84	2.82	1.00
	女子	2.14	0.92	3.14	0.72

3) 外でよくする遊び・運動

いずれの学年の場合も、戸外でもゲーム等の遊びの占める割合が多くなっている。小学生の男子で特にゲームの比率が高くなっている。

		①		②		③	
		ゲーム	%	カード遊び	%	キックベース	%
小学5年生	男子	ゲーム	65%	カード遊び	49%	キックベース	48%
	女子	鬼ごっこ	53%	ブランコ	50%	ゲーム	45%
小学6年生	男子	ゲーム	55%	キックベース	48%	カード遊び	45%
	女子	鬼ごっこ	54%	ゲーム	44%	ブランコ	38%
中学1年生	男子	野球	32%	ゲーム	31%	サッカー	29%
	女子	ゲーム	32%	バドミントン	25%	鬼ごっこ	22%
中学2年生	男子	ゲーム	48%	サッカー	29%	キャッチボール	25%
	女子	バドミントン	21%	鬼ごっこ	22%	ゲーム	19%
中学3年生	男子	ゲーム	48%	サッカー	31%	野球	27%
	女子	バドミントン	18%	ゲーム	10%	バスケットボール	9%

4) 学校での目標

特に小学校6年生男子と中学2年生の男女ともに3割強の生徒が学習や生活目標について否定的な態度がうかがえる。

表5. 学校での学習や生活の目標を大切にしているか？(選択率)

		いつも している	だいたい している	あまり していない	ぜんぜん していない
小学5年生	男子	19%	49%	21%	6%
	女子	24%	61%	12%	2%
小学6年生	男子	11%	54%	26%	7%
	女子	6%	70%	19%	3%
中学1年生	男子	16%	52%	23%	7%
	女子	11%	59%	26%	2%
中学2年生	男子	14%	49%	27%	8%
	女子	5%	61%	26%	5%
中学3年生	男子	19%	48%	20%	10%
	女子	14%	58%	24%	3%

5) 自己認識に関する項目

①熊大式コンピタンス尺度

いずれの有能感も学年が進むごとに低下傾向にあることが示されている。思春期における葛藤等が関与しているとも考えられるが、メンタルヘルスを考えていく上でも注目する必要がある。女子における身体的コンピタンスの落ち込みにも対応する必要があるだろう。

表6. 熊大式コンピタンス尺度因子得点

		能力コンピタンス		自己評価コンピタンス	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
小学5年生	男子	30.55	7.34	12.91	4.10
	女子	32.39	6.12	13.12	3.82
小学6年生	男子	29.32	7.41	11.77	3.81
	女子	30.10	5.95	12.15	3.81
中学1年生	男子	29.38	6.74	11.44	3.37
	女子	29.85	5.91	11.33	3.19
中学2年生	男子	28.42	7.19	10.80	3.33
	女子	29.35	6.69	9.57	3.24
中学3年生	男子	28.63	7.31	10.75	3.96
	女子	29.36	6.18	9.68	3.27
		身体コンピタンス		対人コンピタンス	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
小学5年生	男子	10.80	3.39	14.50	3.16
	女子	10.05	3.01	14.96	2.91
小学6年生	男子	10.47	3.38	13.56	3.42
	女子	9.73	2.94	14.19	3.06
中学1年生	男子	10.13	3.06	13.28	2.94
	女子	9.40	3.31	13.91	2.63
中学2年生	男子	9.89	2.91	12.82	3.24
	女子	9.77	2.98	13.59	2.88
中学3年生	男子	9.26	3.41	13.05	3.52
	女子	8.59	2.92	13.51	2.82

②身体活動についての認識(身体活動の恩恵負担尺度)

体を動かすことへの肯定的な意識は、学年によって大きな開きはないが、中学2年生がやや低調となっている。負担では、中学生の方が高くなっている。

6) 身体活動の認識と学校適応との関連

身体活動の恩恵の得点が高いほど、学校生活や友人関係での適応感が良好であることがわかる。また逆に身体活動の負担は、反対に学校不適応や対人不適応を増大させている可能性があ

る。

表7. 身体活動の認識と学校適応との関連

		学校親近感	友人適応感	学校嫌悪感
恩恵	全体	0.26 **	0.26 **	-0.21 **
	男子	0.28 **	0.34 **	-0.15 **
	女子	0.19 **	0.11 **	-0.32 **
負担	全体	-0.15 **	-0.11 **	0.25 **
	男子	-0.12 **	-0.12 **	0.19 **
	女子	-0.23 **	-0.15 **	0.31 **

*: p<.05 ** : p<.01

(2) 中学校におけるピアサポート活動の成果

平成19年度の目的:「仲間との身体活動を通して、リーダーシップを高めよう」

第1回 日時:平成19年6月25日

テーマ:「自分・他人を知ろう」(武道場にて)

	時間	活動内容	用具
導入	10分	1 活動の趣旨説明、大学生自己紹介 2 事前アンケート	質問紙の配布
展開	10分	3 自己分析、他者分析 ①グループ内で自己紹介をする →名前、学年、趣味、好きなテレビ番組 →メンバーの第一印象を表にまとめる ②自分の短所長所を記入する	記入用紙の配布
	15分	4 指示ゲーム ①グループの1人が課題の絵を見て、他のメンバーに口頭で説明して描かせる (注意事項:他のメンバーに絵を見せない 「~のように」といった表現を使わない) 5 ジェスチャーゲーム 扇風機、スイカ割り等のテーマを言葉を使わずに伝達する 6 プレゼントカードの作成 紙のメンバーについて、長所・持ち味を記入して伝える	課題の絵の提示 プレゼントカードの配布
整理	10分	振り返りシートの記入 今日のまとめ	振り返りシートの配布

第2回:平成19年12月6日,テーマ:相互理解
第3回:平成20年3月5日,テーマ:自分の考えを正確に伝えよう,の3回実施

また実施にあたって以下のような体制を構築した。○教員・カウンセラー・保健師自身の研修と連絡会の実施○多機関協働運営による大学生ピアサポーター養成講座の実施○生徒の変容の自己評定・他者評定の実施等をシステム化

生徒の自主的な参加が増え、自己への気づきが深まるばかりでなく、大学生や教員の生徒理解にも影響を与えた。

表8 19年度ピアサポート活動における生徒の認識

		自己受容	自己実現	自己表明	怒り	身体状況認識	認知的共感性
態度	6月	0.16	0.07	0.08	0.08	0.37 *	0.15
	12月	0.23	0.49 **	0.29	0.10	0.47 **	-0.12
	2月	0.50 **	0.26	0.39 *	-0.08	0.09	0.28
伝達	6月	0.21	0.12	-0.02	-0.17	0.34 *	-0.15
	12月	0.35 *	0.36 *	0.18	0.06	0.33 *	0.13
	2月	0.48 **	0.37 *	0.49 **	-0.17	0.11	0.44 **
貢献度	6月	0.20	0.15	0.12	0.05	-0.07	0.05
	12月	-0.10	0.09	-0.07	0.19	0.05	0.09
	2月	0.42 **	0.31	0.35 *	-0.06	-0.03	0.08
充実感	6月	0.01	0.21	0.01	-0.17	0.10	0.13
	12月	0.61 **	0.45 **	0.49 **	0.17	0.40 *	0.10
	2月	0.31 *	0.07	0.22	0.00	0.12	0.09

活動に参加して良好な自己評価をしている生徒ほど自己肯定感が高く、自己の身体について良好な認識を示している。

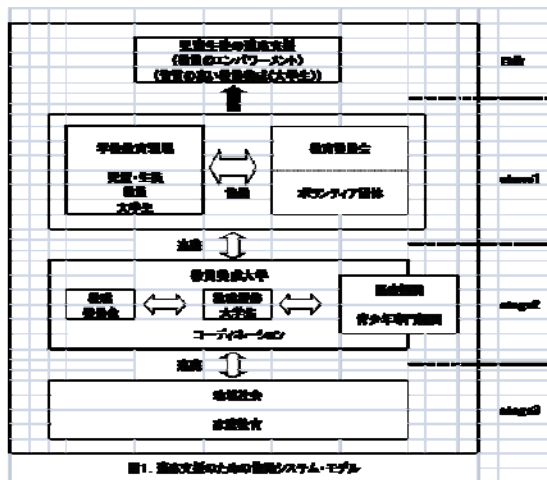
表9 平成19年度 活動の充実感と学校適応

		学校適応	体調不良	対人トラブル
態度	6月	0.26	0.06	-0.23
	12月	0.50 **	-0.12	0.15
	2月	0.30 *	-0.17	-0.42 **
伝達	6月	0.14	-0.01	-0.11
	12月	0.18	-0.18	0.06
	2月	0.21	-0.12	-0.17
貢献度	6月	0.06	0.17	-0.23
	12月	0.24	0.15	-0.09
	2月	0.28	-0.07	-0.40 **
充実感	6月	0.12	0.09	-0.25
	12月	0.33 *	0.06	-0.17
	2月	0.35 *	-0.25	-0.29

活動に参加して良好な自己評価をしている生徒ほど学校適応感が高く、対人トラブルが少ない結果となっている。

(3) 小学校でのスクールサポート体制の検討

1) 図1のように児童生徒の適応支援を目指した協働システムモデルを基礎とした。



Stage1は学校現場そのものであり、stage2は教員養成機能をもつ大学であり、医療等の専門機関と連携しながらこのモデルの調整的な役割を担う。目的は児童の適応支援だが、教員の助力となること、また質の高い教員養成にも資するものである。

2) 教員へのインタビューと質問紙調査

年度末にサポート活動と体制の評価を、教員に依頼した。主な内容を列挙する。
 ○教師一人では目の届かない点もフォローできて孤立する子どもが少なくなった。
 ○学校全体に若い力が加わって活気が出てきた。
 ○担任とサポーターの関係が良好だと児童に良い変化が見られる。

おおむね、良好な効果が認識されているが、課題として以下の点が指摘されている。

「教員がサポーターに依存してしまう傾向もある」「各学級のサポーターを固定した方がより効果が上がるのではないか」「サポーターとの意見調整の時間がとりにくい」等

3) サポーターから提出された課題

サポーターも教員になる動機づけが高め

られ、児童への対応を学ぶ機会が多い反面、以下のような問題点も挙がっている。

「学校側のアセスメントが不十分な児童への対応が困難」「教員の相談役にされ荷が重い」「児童の叱り方、また甘えをどこまで受け入れたらよいのか判断が難しい」「学校内で教員と話し合う時間が不足する」等が指摘された。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）〔学会発表〕（計5件）

① 田中純夫、杉浦幸、川田裕次郎、水野基樹、中学校におけるピア・サポート・プログラムのシステム構築、人類動態学会会報第86号、P23、2007、査読無

② 田中純夫、山本真己、中山恵一、川田裕次郎、杉浦幸、水野基樹、北村薫、児童生徒の適応支援を目的としたスクールサポート体制の構築—特別支援と開発的心理教育援助の2側面から—人類動態学会会報第88号、P55-58、2008 査読無

③ 田中純夫、山本真己、今野亮、中山恵一、川田裕次郎、北村薫、中学校における身体活動を取り入れたピアサポートプログラムのシステム構築、日本体育学会第59回大会予稿集P97、2008、査読無

④ 田中純夫、山本真己、中山恵一、北村薫、身体活動に対する認識と有能感および学校適応との関連、日本スポーツ社会学会第18回大会抄録集、P32-33、2008、査読有

⑤ 山本真己、田中純夫、中山恵一、北村薫、身体活動に対する認識と反応的攻撃性および学校適応との関連、日本スポーツ社会学会第18回大会抄録集、P106-107、2008、査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 薫 (KITMURA KAORU)
 順天堂大学・スポーツ健康科学部・教授
 研究者番号：60138360

(2) 研究分担者

田中純夫 (TANAKA SUMIO)
 順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授
 研究者番号：90286170

(3) 研究協力者

山本真己 (YAMAMOTO MASAKI)
 順天堂大学・スポーツ健康科学部・助手
 中山恵一 (NAKAYAMA KEIICHI)
 順天堂大学・大学院スポーツ健康科学研究科・博士課程後期
 川田裕次郎 (KAWATA YUJIRO)
 順天堂大学・大学院スポーツ健康科学研究科・博士課程後期